

機械工学者らの唱導による戦前日本の工業教育改革運動と東京科学博物館の設立 / 馬淵浩一 20 卷 2 号、21-37 (2016)

本論文は 1931 年に事実上の自然史科学館として創設された東京科学博物館（現・国立科学博物館）に関して論じるものである。研究の結果、次の 2 点が明らかになった。(1) 所期の計画はドイツ博物館をモデルにした工業博物館であった。(2) 工業教育改革を目的に加茂正雄が工業博物館のコンセプトを提案した。

第 1 次世界大戦によって、日本の指導者は日本の工業発展のために科学に基づく大量生産技術が必要であることに気付いた。先進的な機械工学者である加茂正雄と斯波忠三郎は、工業博物館を設立して科学と技術の公衆理解増進を含む工業教育改革が重要であると主張した。彼らの助言に基づき、機械学会、工学会、工政会などが様々な工業教育改進黨を提案した。加えて加茂は、科学と技術の結合をテーマとしたドイツ博物館を 1924 年に訪問し、翌年、日本にも同様の工業博物館が有用であることを強調した。

加茂によってもたらされたドイツ博物館の情報に基づき、館長の秋保保治によって東京科学博物館が設計された。しかしながら、工業部門の展示は 2780 m²の展示室をもつ分館でのみ実現した。1923 年の関東大震災に被災した皇室博物館が所有するおよそ 94000 点の自然史資料の移管を受け入れ、秋保案に反して、本館は事実上の自然史博物館として建設された。当時、博物館行政を所管する文部省は、博物館を学術研究と教育の施設として位置づけており、工業振興の施設を博物館として認めることに消極的であった。